

重要文化財

大山寺阿弥陀堂



〒689-3318 鳥取県西伯郡大山町大山 TEL0859-52-2158

だいせんじ 大山寺のあゆみ

中国地方最高峰を誇る秀峰大山は、古くから山岳信仰の対象とされてきた霊山である。早くから山岳修行者が入り、11世紀中頃には『新猿楽記』にも記されているように、山伏などが修行を積む「修験の山」として広く知られるようになった。大山の中腹に営まれた大山寺の歴史は古く、奈良時代の養老二年（718）の創建と伝えられている。

承安二年（1172）寄進の鉄製厨子(重要文化財)銘から、12世紀後半までには中門院、南光院、西明院の三院が成立し、寺の運営は三院の合議で営まれたことが知られている。

大山寺では地蔵信仰を中心とし、地蔵菩薩の垂迹である大智明権現だいちみょうごんげんを祀る社を本社とした。また、中門院は大日如来と霊像権現れいざうごんげん(観世音菩薩)、南光院は釈迦如来と金剛童子こんごうどうじ(薬師如来)、西明院は阿弥陀如来と利寿権現りじゅごんげん(文殊菩薩)を信仰する神仏混合の集団であり、それぞれの堂社を核にして僧坊群が形成されていった。大山寺は中世に最盛期を迎えたと言われている。近年、僧坊の一つが調査され、14世紀～15世紀頃の豊かな経済力や文化交流を示す陶磁器などの出土品が多数確認された。

近世初頭の検地で寺領が減らされたが、豪円僧正ごうえんの尽力によって慶長十五年(1610)に寺領三千石が安堵され、西楽院を本坊とする一山管理が始まった。寛文十年(1670)には一山三院四十二坊と呼ばれる体制も確立された。寺領内では鳥取藩などとは異なる独自の政治が行われた。また、地蔵信仰に端を発する牛馬信仰も盛んとなり、大山博労座で開かれた牛馬市は日本三大牛馬市の一つと謳われるまでになった。

江戸幕府が崩壊し、経済的な基盤であった寺領を失った大山寺は、明治政府による神仏分離の政策によって、明治8年（1875）には大山寺号が廃絶、大智明権現社が大神山神社の奥宮とされるなどの大打撃を受け、急速に衰退していった。僧侶の多くは大山寺を離れていったが、山内に残ったわずかな僧侶たちが、明治36年(1903)の寺号復活後に大山寺運営を始めた。現在では42あった僧坊のうち、当時の面影を残す茅葺きの建物は、5棟(寿福院、洞明院、金剛院、普明院、理観院)のみである。

大山寺阿弥陀堂の概要

大山寺阿弥陀堂は室町時代末期の天文二十一年(1552)に建立された西明院谷の中心となる建物で、史跡大山寺旧境内に現存する最古の建築物である。

正間5間（約11m）、奥行5間（約11m）の正方形平面で造られており、縁端では14m×14mを測る。頂部が地面から高さ約7mとなる屋根は柿葺きの宝形造である。堂正面には向拝ごはいが付くが、これは寛政七年(1795)に大工棟梁の戸田源七によって加えられた江戸時代の建築である。

棟札には享禄二年(1529)に被災した常行堂の古建材を用いて建立したことが記されている。木造阿弥陀如来坐像の配置や建物構造などから、従前の阿弥陀堂をもとに常行堂を兼ねる建物として建立したものと考えられる。

こけらぶ

柿葺き

社寺の屋根を葺く手法の一つで、厚さ3ミリ程度の柿板を3cmくらいの間隔で重ね、竹釘で止めたもの。こけら材には杉や檜、サワラなど水に強い材木が用いられる。



こうりょう

虹梁

社寺建築などで構造的に強度をもたせるために虹のように弓形に曲げて美しく仕上げた横木で、時代により特色がある。

平安時代のものは曲がり方が強く、時代が下るにつれ緩やかになる。この虹梁は江戸時代のもの。



きばな

木鼻

平安時代以前には彫刻的な木鼻はなく、簡単な彫刻から発展し、現在では象、獅子、若葉、牡丹などの動植物から雲、波、渦などの自然物まで使われるようになっている。阿弥陀堂の木鼻には、植物の禅宗様系木鼻と象が使われている。



かえるまた

蟬股

蟬股はカエルの脚に似ていることから名付けられた。梁の上部の荷重を支える目的で造られたもので、時代が新しくなるにつれて蟬股の背が高く厚みが薄くなる。



とぎょう

斗拱

軒周りや縁下などに使われる木組で、阿弥陀堂のものは柱頭に置く組み方で和様と呼ばれる。

かとうまど

火灯窓

花の形に似ていることから花頭窓とも呼ばれている。主に明かり取りの窓として名付けられ、唐様建築の細部として鎌倉時代に日本に入ってきたもの。仏堂や付け書院などに用いられる。



げぎょ

懸魚

棟木や桁の先端を隠すために付けられた装飾品で、魚を象徴化した装飾が取り付けられ、水のシンボルとして火災を避けるための魔除けとされている。

らんま

欄間

彫刻欄間が最も発達するのは桃山・江戸時代初期頃で立派なものが造られる。龍をモチーフにした阿弥陀堂の欄間もこの頃に造られたものである。



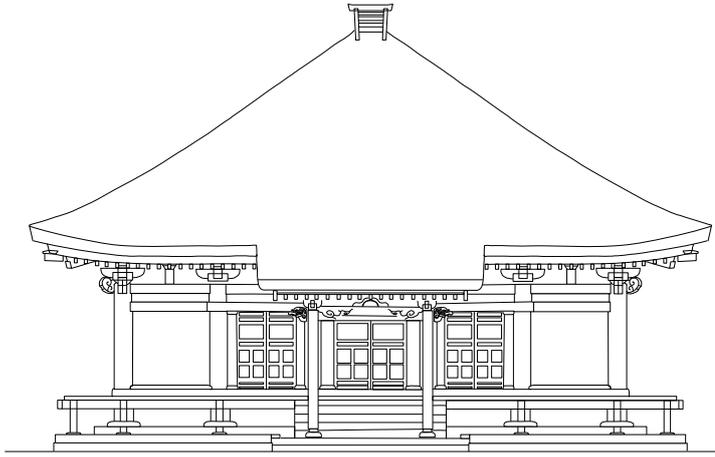


木造阿弥陀如来坐像

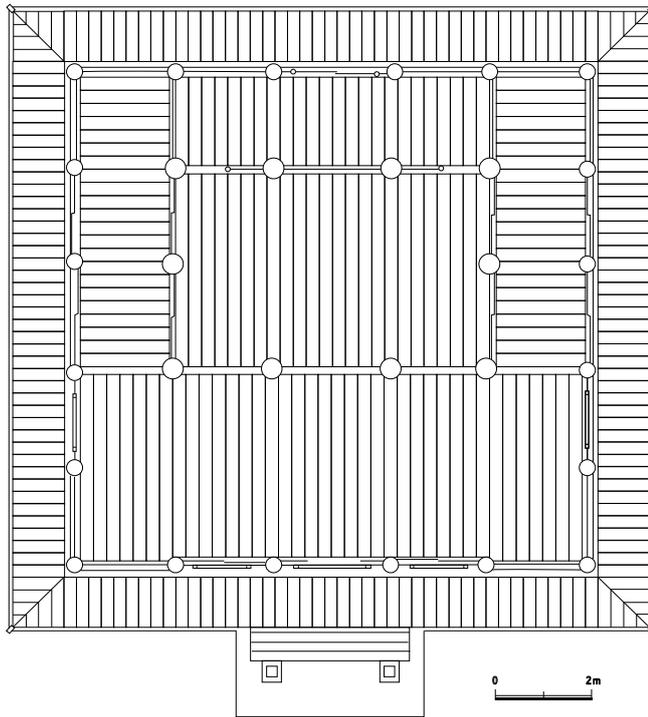
木造阿弥陀如来坐像は、偏袒右肩に衲衣をつけ、上品上生の印を結んで、^{じょうぼんじょうしゅう}結跏趺坐する丈六(266cm)の仏像で、山陰最大級の大きさを誇る。天承元年(1131年)に大仏師良圓により栃の木をくりぬいて一木造で作られたものである。台座は^{もかけざ}裳懸座で弘安九年(1286年)と宝暦七年(1757年)に修理された銘文がある。光背は二重円相周縁飛天光背と呼ばれ、中央に大日如来を円の周縁には左右に5体ずつの飛天を配置している。

両脇侍像は、正面に向かって左側が勢至菩薩立像、右が観世音菩薩立像である。勢至菩薩立像は未開花の蓮の花(未敷蓮華)を持ち、観世音菩薩立像は開花の蓮の花(開敷蓮華)を持っている。台座は蓮華六重座で漆箔仕上げである。

阿弥陀如来は無量光如来とも無量寿如来とも呼ばれ、西方の極楽浄土への往生成仏のための身近な礼拝対象として信仰された。



阿弥陀堂正面図



平面図



棟札

指定物件

名称	員数	時代	年号	構造及び形式
大山寺阿弥陀堂	1棟	室町時代末期	天文二十一年 (1522年)	宝形造、柿葺 正面五間、奥行五間
木造阿弥陀如来及び両脇侍像	3軀	平安時代末期	天承元年 (1131年)	阿弥陀如来坐像 (266cm) 二重円相周縁飛天光背 (434cm) 裳懸座 (178cm) 左脇侍 (270cm) 右脇侍 (263cm) 舟形拳身光背 (345cm) 六重蓮華座 (81cm)